

Yamoyden から *Metamora* へ

1820 年代の先住民物語

中村 正廣

フィラデルフィア生まれの科学者 Adam Seybert の著書 *Statistical Annals of the United States* (1818) を書評した Sydney Smith の言葉、“In the four quarters of the globe, who reads an American book? or goes to an American play?”¹ という文言が、Herman Melville² を初めとする多くのアメリカ人の怒りを買ったことはよく知られている。この書評が *Edinburgh Review* 誌に掲載された 1820 年、英国から遠く離れた大西洋の彼方のこの国では、作家や詩人たちが固有の文学を求め粉骨砕身の努力を続けている最中であり、1820 年代はそれが大きく花開いた時代であった。*The Pioneers* (1823)、*The Last of the Mohicans* (1826)、*The Prairie* (1827) など、レザーストック物語を相次いで発表した James Fenimore Cooper ばかりがこのアメリカ固有の文学題材に執着していたわけではなかった。アメリカ先住民を合衆国固有の題材として選択した多くの作家たちがそれを大衆文学、大衆演劇として発展させ、それに伴いメタコムを初めとする 17 世紀のニューイングランドの先住民を主人公、もしくは準主人公とする数多くの小説や詩や劇が現れたのもこの時代であった。この作品群の後の世代への影響は甚大なものがあり、例えば 1820 年出版の *Yamoyden* はその後も読み継がれ、1829 年初演の *Metamora* は半世紀以上にわたって大衆演劇としてアメリカ国内で演じ続けられた。本論文では、近年の Lydia Maria Child や Catharine Maria

Sedgwick の作品の再評価を契機に注目を浴び始めたこの 1820 年代において、アメリカ人がどのような形でアメリカ先住民を自らの文学の中に取り込み、そのアメリカ的なフォーマットの中でこの固有の題材をいかに変容させていったかを、*Yamoyden* から *Metamora* までのこの時代の小説、詩、劇の中に辿りながら考察したい。

1820 年代、及びその直前の主たる先住民物語としては以下のものが挙げられるが、本論文では主にニューイングランド先住民が登場する作品（* のついたもの³）を扱うことにする。

Robert Rogers, *Ponteach* (1776)*

James Nelson Barker, *The Indian Princess; or, La Belle Sauvage*
(1808)

Washington Irving, “Philip of Pokanoket” (1814, *Analectic Magazine*)*

James Wallis Eastburn and Robert Charles Sands, *Yamoyden*
(1820)*

Joseph Doddridge, *Logan* (1821)

Henry Whiting, *Ontwa: The Son of the Forest* (1822)

James F. Cooper, *The Pioneers* (1823)

James E. Seaver, *A Narrative of the Life of Mrs. Mary Jemison*
(1824)

Lydia Maria Child, *Hobomok* (1824)*

Bryant, “An Indian at the Burying-Place of His Fathers” (*United States Literary Gazette*, August, 1, 1824: 125)

Nicholas Marcellus Henty, *Tadeskund, the Last King of the Lenape*
(1825)

Cooper, *The Last of the Mohicans* (1826)

Cooper, *The Prairie* (1827)

Catharine Maria Sedgwick, *Hope Leslie* (1827)*

George Washington Parke Custis, *The Indian Prophecy* (1827)

Cooper, *The Wept of Wish-Ton-Wish* (1829)*

Bryant, "An Indian at the Burying-Place of His Fathers," *Cherokee Phoenix and Indians' Advocate*, vol. II, no. 17, July 29, 1829.

William Apess, *A Son of the Forest: The Experience of William Apess, a Native of the Forest* (1829)

John Augustus Stone, *Metamora* (1829)*

この時代に先行する 1810 年代、合衆国は米英戦争でのテクムセとの戦い、同じく米英戦争を契機に勃発したクリーク戦争、更には第一次セミノール戦争と、アメリカ先住民との武力衝突の中で領土を拡大していくが、1824 年、先住民の年金、経常費の配分、先住民の文明化に伴う経費を取り扱い、先住民と白人の権利衝突に関する判断を行うインディアン局を John C. Calhoun が陸軍省内に創設したこともあり、1820 年代にはさほど大きな武力衝突は見られない。強制移住法 (1830) の成立で幕を開け、ジョージア州からチェロキー族をはじめとする文明五部族が強制移住させられ、更には第二次セミノール戦争 (1835-1842) が勃発した激動の 30 年代と比べると、両者の間の大きな武力衝突のない、比較的平穏な十年であったと捉えることもできるのだが、その平穏さはあくまで表層的、皮相的なものであって、それは 1825 年 1 月 27 日 James Monroe 大統領が議会への一般教書の中で、先住民の自発的移住が合衆国にとって非常に重要であると演説していることから窺い知ることができる。と同時に、この 1820 年代は先住民を扱った通俗文学、大衆演劇が数多く現れ始めた十年

でもあり、この時代の総決算とも呼ぶべき、1829年初演の *Metamora* がその後六十年近くもアメリカ各地で繰り返し演じられ、数多くの村や町の名前として採用されたことから、文化的にはアメリカ国民に後々まで大きな影響を残した時代とも言えるのである⁴。

インディアン局創設の1824年、生臭い政治とは縁遠いとされる文学に関する非常に興味深い出来事が起きているので、まずはそれに触れておきたい。次の引用はチャイルドが *Hobomok* を発表する一カ月前の1824年4月、マサチューセッツ州カミントン生まれの William Cullen Bryant (1794-1836) が妻フランセスに送った手紙の一節である。

I have on the whole made up my mind not to come home this week—the weather has been so bad that I have seen little of the city as yet—and as there is no knowing when I shall be here again, I think I had better take time to look about me before I leave the place.—Miss [Catharine] Sedgwick has undertaken the charge of getting a bonnet for you, but as the weather has been rainy for two or three days past she has not been out, and I do not intend to come away till the bonnet is bought.

I dined yeste[rda]y at Mr. Robert Sedgwick's in a company of authors. Mr. [James Fenimore] Cooper the novelist—Mr. [Fitz-Greene] Halleck, author of Fanny—Mr. [Robert Charles] Sands author of Yamoyden—Mr. Johnson the Reporter—& some other literary gentlemen—Mr. Cooper engaged the whole conversation to himself—he seems a little giddy with [the] great success his works have met with. (*Letters* 154)

マサチューセッツ州ストックブリッジ生まれのセジウィック(1789-1867)の2歳年上の兄 Robert Sedgwick のニューヨーク市の家で、*Yamoyden*の作者の一人である Robert Charles Sands (1799-1832)、それから当時作家として成功を収めつつあったクーパー (1789-1851)、この二人を含む文学者たちと食事をともにしたというものだが、先住民物語の歴史的展開という観点から見ると非常に重要な様相を帯びてくる。1816年弁護士としてグレイト・バリントンに赴いたときからセジウィック家と親しくしていたブライアントは、キャサリンとも親交を深めていた。そのブライアントはその後マサチューセッツでの弁護士稼業に嫌気が差し、キャサリンの兄たちに誘われニューヨークを訪れていたわけだが、上記の晩餐会でクーパーたちニューヨーク出身の作家の知己を得ることになる。興味深いのは、彼がこの出会いのすぐ後の同年8月に“An Indian at the Burying Place of His Fathers”を発表していることである。そしてこのブライアントは、1829年 Edwin Forrest が募集した、先住民を主人公とするという条件付きの懸賞劇の審査委員会の長として *Metamora* を選ぶという役回りも演じる。それだけではない。この晩餐会に出席していないチャイルドの小説 *Hobomok* のタイトル頁、及び第十二章のエピグラフとして使われているのは、アメリカを「愛と自由精神の結晶の国」とするブライアントの“The Ages”⁵からの引用であること、更にこの *Hobomok* に大きな影響を受けたと思われる⁶ セジウィックの *Hope Leslie* が出版されるのはわずか三年後の1827年であることを考慮すれば、この文学者たちの晩餐会が後のアメリカ文学に与えた影響は甚大なものがあったと言える。*Yamoyden*、*Hobomok*、*Hope Leslie*、それにこの三作品に多大な影響を受けたと思われるクーパーの *The Wept of Wish-Ton-Wish* のいずれにおいても、アメリカ先住民男性と白人女性の結婚が登場しているのは、同じ1824年に James E. Seaver が発表したメアリー・ジェミソンのセネカ族の中での生

活の記録が十万部以上売れたことも多少の影響があったことは否定できないが、それよりも四年前に発表された *Yamoyden* の中の先住民男性と英国人女性との結婚に端を発していることは明らかである。この 1824 年の文学者の出会いが示唆しているのは、17 世紀のニューイングランド先住民をテーマとした作品によって文学史にその名を残したこれらの文学者が、ニューヨークとマサチューセッツという異質な文化の中を行き来しつつ互いに影響を与えながらひとつの流れを作ったことである。そして Andrew Jackson の政策を支持したブライアントがこの文学集団の要石的役割を果たしている点は忘れてはならない⁷。

この文学者たちの出会いの四年前に発表され、この時代の作品群の端緒を開いたとも言える *Yamoyden* はどのようなものか。これが当時いかなる時代背景のもとに現れ、どのように当時の英米の文壇において評価され、そしてこの先住民物語の祖型とも言える物語が 1820 年代にいかなる形で変容していったかを、後に続く先住民物語と比較検討しながら見ていくことにする。

Yamoyden は白人との戦いに敗れたメタコムがモンタープに逃げ、最後の復讐の戦いを誓うところから始まる。多くの仲間や長を失った悲しみと白人による不当な仕打ちや不正に触れつつ、戦意を喪失した部下の士気を高めようとするが、モヒーガン族の一員でありながらメタコムと一緒に闘ってきたアガモウンが白人に降伏するしか生き残る道はないと主張し、メタコムはこれに激怒し彼を処刑する。そこにはもう一人のモヒーガン族がおり、このアホートンはアガモウンの処刑に反対はするものの、結局メタコムの命に従う。メタコムは部族の結集を図るため、彼の主義に賛同するニブネット族のヤモイデンが白人女性と結婚し、子供を一人もうけていることに注目し、家族への愛情を断ち切り、白人を敵として憎悪することができるよう、メタコムは密かにヤモイデンの妻と子供を連れ出すようにア

ホートンらに命じる。ヤモイデンの妻ノーラは子供のとき父フィッツジェラルドに連れられ英国からアメリカに渡ってきた。父子がニューイングランドに移ってしばらくして、二人の小屋に一人の先住民が足繁く通い、ノーラは彼の話を書くうちに彼を愛するようになる。やがて彼女はそのヤモイデンのもとへ逃げ、彼と結婚、ヤモイデンの小屋で暮らし、子供が生まれる。

話変わって、ノーラとその子供はメタコムの命令を受けた彼の部下に連れ去られるが、ノーラを抱きかかえていたのはアホートンで、白人の集団が海岸で先住民たちを襲ったときに彼女を助ける。しかし、彼女の子供は連れ去られてしまう。ノーラは白人のところへ連れて行かれ、父フィッツジェラルドと再会、彼は娘を許し、他の白人に彼女を託して、白人の軍と一緒に先住民攻撃に加わる。一方、ノーラは子供と夫のことが脳裏から離れず、アホートンに頼み込んでメタコムが立てこもるモンタープに向かう。最後の先住民と白人の戦闘場面で、ノーラはメタコムがアホートンに殺されるのを見る。次に父フィッツジェラルドに振りかざされた他の先住民のトマホークが、フィッツジェラルドを救おうとしたヤモイデンに振り下ろされるのを見たノーラは夫のところへ駆け寄る。フィッツジェラルドが見つめる中死にゆくヤモイデンを抱きしめるノーラであったが、二人は一緒に息を引き取る。二人が死ぬ前にフィッツジェラルドは二人の子供は自分が助けたこと、自分が育てることを二人に伝える。

以上が物語の大まかな流れだが、発表直後の 1820 年代、更にはアメリカ先住民の強制移住が進行しつつあった 30 年代にあっても、*Yamoyden* は英米において多くの書評の対象となり、概して高い評価が与えられていた。例えば、1820 年 12 月ニューヨークの *Ladies Literary Cabinet* 誌は、「(イーストバーンとその友人は) その国の伝説から集めた歴史的事実を詩の精華と結合させ混ぜ合わせており、そしてそれをその土地に近い者だ

けが入手できる、現存する明々白々の証拠によって立証している」(44) と書評し、また二年後の 1822 年ロンドンの *Evenings in Autumn* 誌は、Abiel Holmes の *American Annals*(サンズが第一篇の注で引用しているもの) に言及しつつ、「(フィリップの死は) 当時は悪意に満ちた不倶戴天の敵の死滅と捉えられていたが、現在では偉大なる戦士、明敏なる政治家、権勢を誇る王子の戦死とされている」(265-66) とし、「詩の興味はヤモイデンとその妻ノーラの夫婦の愛情とその悲惨な運命の描写によって、完全にというわけではないものの、主として保たれている」(267) と書いている。

この作品が 1820 年代、30 年代において多くの書評の対象となり、かつ読者にその内容が紹介されていたことは 1834 年 4 月の *New England Magazine* 誌の書評が語っている (334) が、当時の批評に関する限り、物語の展開に難があるなどの批評家の指摘は一部に見られるものの、メタコムを英雄として賛美し、ヤモイデンとノーラの二人の夫婦の愛情を描くこの作品への拒絶反応は見られない⁸。

この物語詩の歴史的な重要性は、フィリップ王戦争から約 150 年を経て書かれたメタコムの物語であること、そしてそれが 1820 年に発表されたことにある。この作品の出版以前にメタコムが登場するものとしては、サンズが数多く引用しているニューイングランドの歴史家の書いた歴史書が主たるものであり、これらを除けば、物語の一人物として彼が与えられた役回りは、かの有名な Mary Rowlandson の先住民捕囚物語の中の、およそ凄絶な死闘とは無縁な人間味溢れる人物か、もしくは例えば 1766 年の Robert Rogers の *Ponteach* にポンティアックの息子として登場するフィリップという陰険な策士ぐらいしかない。*Yamoyden* で初めてメタコムは物語の主人公として登場したのである。

Yamoyden が出版された年が 1820 年であったという事実は、この作品

が更に深い歴史的な重要性を有していることを再認識させる。というのも、この年プリマスではピルグリム・ファーザーズの上陸を記念する式典が盛大に行われていたからである。1769年に結成されたオールド・コロニー・クラブはピルグリム・ファーザーズの上陸記念日を12月22日と定め、一時的な中断はあったものの、毎年この記念日には伝統的な行事として説教などを執り行ってきていたが、50年目の節目の1820年、プリマス市民と他の地域のピルグリムの子孫を含めたピルグリム・ソサイエティが結成され、その第一回目の演説としてDaniel Websterの記念すべき講演が行われた。この演説には、奴隷制度への言及と批判(49-51)はあるものの、アメリカ先住民に対してピューリタンが行った不当な仕打ちに関する言及は全くなく、「感情」と「審美眼」における真理は「主義」と「道徳」における真理とは切り離せないと主張するウェブスターは、ニューイングランドの過去に恥ずべきものは何一つないとしつつ、ニューイングランド社会の発展が生み出した「民衆の自由」と「民衆の幸福」を今こそ文学もその対象とするべきだとしている(51)。

Rufus Choateは1833年、*Yamoyden*の“Conclusion”の一行“I would not wrong thy warrior-shade”を借用しつつ(337)、「メタコムの死を嘲弄する」(338)17世紀のWilliam HubbardやCotton Matherらとは大きく異なる新しい歴史観がニューイングランドに現われていると述べているが、1836年1月8日と26日の二回にわたってボストンで講演したWilliam Apessは、1836年に至っても先住民に対する白人の姿勢は160年前と同じであると語気鋭く言い放っている。エイペスはその*Eulogy on King Philip*において、フィリップ(メタコム)の預言が現実のものとなった(*Writings* 307-8)とまで声高に述べているが、1820年の演説を始めとするダニエル・ウェブスターの一連の愛国主義的発言を念頭に置いて彼が米国の歴史を批判していることは多くの歴史家や文学研究者が指摘

しているところである。更にエイペスの *A Son of the Forest* の巻末の付録には *Yamoyden* に大きな影響を与えた Washington Irving の“Philip of Pokanoket” からの抜粋もあり (Konkle 313)、またエイペスが *Yamoyden* や *Metamora* も知っていた可能性も否定できない (*On Our Own Ground* xix)。*Hobomok*、*Hope Leslie* など、先住民を美德と威厳を備えた民族とし、アメリカの自然と先住民を同一視しつつ、一方で彼らをアメリカから排除していく当時のロマンティックな文学をエイペスが読んでいたかどうかは今ここで検証することは差し控えるが、少なくともエイペスの *Eulogy on King Philip* は、1830年代のアメリカ白人のアメリカ先住民を見る目は1676年当時とさほど変わっていないという認識のもとに書かれたことを表している。

1820年代に登場する先住民物語の小説、詩、劇は、チャイルド、クーパー、セジウィック、ブライアントなどのアメリカ社会の創設期と消えゆく先住民を描いたもの、Henry Whiting の *Ontwa* など先住民同士の争いに部族の消滅を見るもの、*Logan* など白人が行った不当な仕打ちは一部の、いわゆる卑劣な白人の行為のせいとされるものと大きく三つに分かれるが、物語の結末において先住民は命を落とす (*The Wept of the Wish-Ton-Wish* 中のコナンチェット、*Metamora* 中のメタモーラ) か、自らの意思で白人が住み着いた土地を離れる (*Hobomok* のホボモック、*Hope Leslie* 中のマガウイスカ) か、もしくは部族の最後の者として部族の最期を語りつつ死後の極楽浄土を求める (*Ontowa*) かしており、いずれにしても先住民と白人は共存できないというメッセージを共有している。

これらの物語群は *Yamoyden* とは次の二つの点において大きく異なる。一つはメタコムが糾弾する白人によるアメリカの土地の略奪であり、もう一つはヤモイデンとノーラの愛と結婚に対して二人の作者が与えた是認

である。*Yamoyden* 以降の先住民物語においては、アメリカ白人の領土拡大はいわゆる「明白なる宿命」という歴史の潮流として容認され、また、異人種間結婚は、白人女性が幼い時期に誘拐され白人社会から隔離された結果として先住民男性と結婚するか、もしくは精神的錯乱の結果としての結婚という形で物語に組み込まれていく。この祖型の変容の契機となったのがチャイルドの *Hobomok* であり、彼女に *Hobomok* を書かしめた John Gorham Palfrey の書評であった（「*Yamoyden* から *Hobomok* へ」27-57）。

ポールフレイの書評はニューヨークやロンドンなど他の都市から発せられたものとは大いに異なるところがある。それはメタコムを文学作品に取り込むことはニューイングランドの歴史の文芸化には必要であるが、しかし、それはニューイングランドが「危機的状況にあった」(487) 時代を、詩という「余暇の気晴らし」(488) の対象としてはならぬという条件つきのものであった。

ポールフレイは、*Yamoyden* の登場はニューイングランドの歴史をいかにフィクションの中に取り込むかを示した作品として高く評価する形で一般読者に紹介しているが、この *Yamoyden* の登場がいかにニューイングランドに生まれた者にとって不愉快極まりないものであるかを、その書評の最後で語気を荒らげて主張する。*Yamoyden* を「書評したのはそうせざるをえないほど読まれた」作品 (488) であるからであって、これはニューヨークから「ニューイングランドに投げつけられたひとつの挑戦状」(488) であるとまで言い添えている。

実はこの書評をもとにして生まれたのがチャイルドの *Hobomok* であることを我々は見逃してはならない。Carolyn Karcher らによる再評価以来、「家父長制社会の中の女性」という視点から書かれた作品として多くの研究者に高く評価され論じられてきた作品だが、チャイルドはポールフレイ

の警告を敏感に感じ取っていた。*Yamoyden* において、先住民たちが復讐のためにその力を求めるホバモクイ、もしくはホバモック（「悪霊」「蛇」の意）を、歴史上の人物のホボモック、即ち、通訳・ガイドとしてプリマスの人々を助けキリスト教に改宗した先住民のホボモックにチャイルドは変容させる。そしてエイペスが「下劣で悪意のある人物」と評した Miles Standish の攻撃を受けたコービタント（*Yamoyden* にも登場する、メタコムとともに白人と戦ったウィータムーの父）をホボモックの敵役として登場させる。*Yamoyden* では先住民と白人が全面衝突したフィリップ王戦争が扱われているのに対して、*Hobomok* ではスクワント（プリマス植民地で白人にトウモロコシ栽培を教えたポータクセット族）の件で一時的に衝突の危険に晒されながらも事なきを得た歴史を背景にしている。

更に重要な点は、メアリー・コナントがホボモックを夫として受け入れるのは、恋人チャールズ・ブラウンが英国に帰国して以来彼女の支えであった母の死がもたらした精神錯乱状態の結果であるとされていることである。ピューリタン社会と対峙するチャールズの代替物として彼女がホボモックの愛を受け入れていることは明らかである。この二人の関係はチャイルドによって不変のものとして提示され、物語の結末で、船の遭難事故で死んだと思われていたチャールズが再び姿を見せると、ホボモックは自ら身を引き、森の中へ消えていく。

Hobomok を高く評価するカーチャーは、*Yamoyden* を語り直したチャイルドの目指したものを次のように説明している。即ち、アホートンに助けられたノーラが彼女の父親に引き渡され、その後父に許され、そしてヤモイデンが彼女の父を他の先住民の攻撃から救おうとして命を落とすプロットと、それに続く二人の死と先住民の悲劇的結末は、結局のところ白人優越主義と家父長制の権威を脅かすものをイーストバーンとサンズが拒否しているのであって、これこそがチャイルドが *Hobomok* のモチーフ

としたものであり、彼女は *Hobomok* 執筆当時先住民問題にさほど大きな関心を持っていなかったのだと。しかしながら、万が一白人優越主義と家父長制の主張が読み取れるとすれば、それはピューリタン社会の健全な歴史と発展を主張したポールフレイの書評、もしくは彼の書評にチャイルドが読み込んだものであって、フィッツジェラルドをそのような典型的な清教徒と捉えることは不可能に近い。清教徒革命に幻滅し、「天使のような連れ合い」(*Yamoyden* 3. 26. 11) を亡くしてからアメリカに渡ったフィッツジェラルドは、「母親の魅力をすべて豊かに持った娘」(3. 28. 8) がアホートンの手によって自分のもとに連れ戻されたとき、「異教徒の汚れた臥所から出てきた」(3. 33. 32) 娘に今でも深い慈しみを抱いていることを自分自身否定できないような、社会から孤立しつつ娘との絆を唯一の生き甲斐としている人物なのである。最期の場面で自分の娘がヤモイデンにしがみつ唇を合わせたまま息を引き取るとき、「その神聖な抱擁を引き裂こうとしても、神聖冒瀆の罪を犯すナイフ以外いかなる努力も無駄である」(6. 26. 13-15) と感じるフィッツジェラルドは、なす術もなく、「激しい苦悩を感じながら」(16) ただ見つめるしかない。清教徒の歴史に家父長制を読み込んだ *Hobomok* において、メアリーの、父コナントとの対立が、ブラウンの帰還とホボモックの失踪を経て両者の和解への道を辿るストーリーは、皮肉なことに、ポールフレイの歴史観にみられる、英国植民地が「巨大な木」(*Hobomok* 150) となっていく歴史を結果的に擁護したことになる。

Yamoyden では先住民と白人の衝突、そして先住民の「生得の権利」の是非が描写の対象になっているのに対して、*Hobomok* では白人社会の安定化と消えゆく先住民の姿が描かれている。先住民と白人の衝突を描きつつも、その後の両者の和平と、消えゆく先住民を描写の対象にする傾向は、*Hobomok* に続くセジウィック、クーパー、ストーンの商品のいずれにお

いてもはっきりと読み取ることができる。

セジウィックが1827年に発表した *Hope Leslie* は、物語の展開、性格描写、人物配置のいずれの点においても *Hobomok* よりも格段に勝る作品であることは誰の目にも明らかであるが、*Hobomok* を更にニューイングランド的な視点から語り直した物語と言える。恐らく二人の作家が育った家庭環境の違いの影響⁹ もあったと思われるが、主人公のホープ・レズリーはメアリーよりも行動の自由が許されていて、彼女は冒険につぐ冒険の中でウンスロップの支配するピューリタン世界とピークォッドの世界との間を行き来する。しかしながら、たとえネガティブな動機によるものであったにせよ、メアリーが自分の意思でホボモックと結婚して子供をもうけたのに対して、ホープ・レズリーは先住民男性と直接的な関係を持つことはない。彼女に代わって先住民と関わるのは妹のフェイスで、彼女は幼いときに先住民に誘拐され、そのとき一緒にいたマガウイスカの弟のオネコと結婚することになる。ホープ・レズリーは七年後によく会えた妹を懸命に白人社会に連れ戻そうとするが、結局その努力も報われず、逆に以下のようなマガウイスカの説得に応じてホープはフェイスが先住民の世界へ帰還するのを許すことになる。

My people have been spoiled—we cannot take as a gift that which is our own—the law of vengeance is written on our hearts—you say you have a written rule of forgiveness—it may be better—if ye would be guided by it—it is not for us—the Indian and the white man can no more mingle, and become one, than day and night. . . . [Your sister] hath been married according to our simple modes, and persuaded by a Romish father, as she came from Christian blood, to observe the rites of their law. When she flies

from you, as she will, mourn not over her, Hope Leslie—the wild flower would perish in your gardens—the forest is like a native home to her—and she will sing as gaily again as the bird that hath found its mate. (330-32)

先に述べたシーヴァーの *A Narrative of the Life of Mrs. Mary Jemison* の影響や、カナダのモホーク族に同化した Eunice Williams (1696-1786) の話の影響¹⁰ もここにはあるだろうが、サンズとも知り合いであったセジウィックがこのような物語の展開を求めたのは、やはりチャイルドよりも更に異人種間結婚に対して躊躇するところがあったからだろう。

レザーストックング物語で注目を浴びつつあったクーパーがこの *Hobomok*、*Hope Leslie* の二作品の後に書き上げた *The Wept of the Wish-Ton-Wish* (1829) は、アメリカ先住民に課された消え行く運命を進化の必然的結果として読者に強烈に印象づける物語である。物語の冒頭において、先住民の攻撃に備えるための警備巡回の中、コンテンツ・ヒースコウトは一人の先住民の少年コナンチェットを見つけこれを捕虜とするが、先住民による砦への攻撃が始まると、高潔なコナンチェットに信頼を寄せるコンテンツの妻ルースは娘のルースの身の安全を彼に託す。しかし、白人のブロックハウスは敵の攻撃の前に陥落し、ルースはコナンチェットとともに先住民に連れ去られる。これは神が与えた罰であると祖父のマーク・ヒースコウトは皆に諭すが、これ以降物語は急展開を見せる。

数年が経ち、白人の植民地が、競うことから学んだ「必要」と「自由」の追求によって荒野を征服し、繁栄を享受しているときに、再び先住民との衝突が起きる。コナンチェットは白人の村への攻撃に加わるが、これはワンパノアグ族のメタコムMetacombの鬨の声に依じての行動であった。しかし、神の御心に従ってこの荒野へやってきた自分たちは、先住民に対する不法な

行為に及んだことは一度もないと強く主張するコンテンツに対して、クーパーはメタコム反論を許さず、メタコムを自らの意思で引き揚げさせる。更には、荒野に先住民と白人が共存して生きることができないことを、ルース(ナラマター)を妻としたコナンチェットを通して読者に伝えている。

The leaf of the hemlock is like the leaf of the sumach; the ash, the chestnut; the chestnut, the linden; and the linden, the broad-leaved tree which bears the red fruit in the clearing of the Yengeese; but the tree of the red fruit is little like the hemlock! Conanchet is a tall and straight hemlock, and the father of Narra-mattah is a tree of the clearing that bears the red fruit. The Great Spirit was angry when they grew together. (549)

コナンチェットはマークの友人のサブミッションを先住民から救おうとして逆に白人に捕まり処刑される。これを知ったルースはやがて命を落とすのだが、非常に興味深いことに、死の直前のルースは幼いときの記憶を回復し、コナンチェットとの生活の記憶を消し去られた状態で天国へ召されたことがあからさまな感傷の渦の中で読者に伝えられ、二人の子供がその後どうなったかは全く分からずじまいなのである。

同じ年にニューヨークでの初公演を迎えた *Metamora* は、マサチューセッツ州コンコード出身の俳優であり劇作家の John Augustus Stone (1800-1834) がフォレストのために書いた劇で、ニューヨークのみならず、フィラデルフィア、ニューオーリンズ、セントルイスでも評判を取った。ニューヨークにおけるフォレストの上演目録には常時入っていた作品で、フィラデルフィアではその後25年間のうち *Metamora* が演じられなかったのは二シーズンのみだったと言われている (*Metamora and Other*

Plays 4)。

この作品は *Yamoyden* と全く様相を異にするメタコム像を提供しているという点では *Hobomok* や *Hope Leslie* などのマサチューセッツ発の物語と非常によく似ている。共通点としてメタモーラが白人とは敵対的ではないことが挙げられる。白人たちの前に召し出されたとき、メタモーラは先祖代々の土地を放棄するつもりはない、奴隷に身を貶めるつもりはないと主張するが、最初から白人とは友人であり、争うつもりはないと断言し、加えて父マサソイトがオセアーナの母から命を助けられたことに恩義を感じるメタモーラは、オセアーナに対して妻ナミオキへの愛と同等のものを感じており、自身が危険に晒されながら白人のもとから逃げるときですら、彼女をフィツァノールドの魔の手から救うこともやってのける。と同時にクーパーの物語の展開（例えば劇の始まりのオセアーナが語る話に出てくる、パンサーから彼女を救ってくれたという話や、国王殺害のために彼女の父がアメリカで王党派から狙われるのを恐れ、そのために彼女をフィツァノールドと結婚させざるをえないという物語の展開、など）を入れることでニューヨーク色を出しているが、ニューヨークとマサチューセッツの二つの土壌の混成から出来上がった *Metamora* は、メタモーラの高貴な先住民像を強く印象づけることで、これとは二律背反的な合衆国の領土拡大という命題を巧みに回避したと言える。

劇がついに最終幕に入ったところで、白人の捕虜となった妻ナミオキを人質交換という上辺の解放で殺そうとしたフィツァノールドを、メタモーラは自分の手で成敗する。そして、呪い師が部族の滅亡を預言し、一人息子も敵の銃弾に倒れ、敵に包囲される中で再び妻が捕縛されるのを避けるために自分の手で妻を刺し殺し、白人たちの銃撃の前に自ら身を晒して死んでいく。

My curses on you, white men! May the Great Spirit curse you when he speaks in his war voice from the clouds! Murderers! The last of the Wampanoags' curse be on you! May your graves and the graves of your children be in the path the red man shall trace! And may the wolf and panther howl o'er your fleshless bones, fit banquet for the destroyers! Spirits of the grave, I come! But the curse of Metamora stays with the white man! I die! My wife! My queen! My Nahmeokee! [*Falls and dies; a tableau is formed. Drums and trumpet sound a retreat till curtain. Slow curtain*] (40)

メタモーラが息絶える前に発するワンパノアグ族の最後の者としてのこの呪いは、先住民問題と深く絡み合う合衆国の領土拡大に関する問題意識とそれへの疑義の念を観客に植え付ける力はなかったはずである。Jill Lepore が指摘しているように、1829年12月15日の夕方、ニューヨークのパーク劇場を埋め尽くした観衆がこのメタコム（Metamora）の死と彼の呪いに恍惚として拍手喝采できたのは、メタモーラが「命を奪われたインディアン」だからであり、「今は死語となったインディアンの言葉」で彼らに語りかけたからであった（225）。そしてまた、チャイルド、セジウィック、クーパーが彼らなりの巧みなストーリー展開によって処理した異人種混淆の要素も、*Metamora* は不要のものとして切り捨てており、*Yamoyden* が提起したアメリカ白人文明のありようへの真摯な疑問を完全に闇の中に葬り去ることによって、まさにアメリカ大衆演劇にうってつけのメタコム像を提供したと言える。

先住民を主人公とした懸賞劇に応募しその審査に漏れた Robert Montgomery Bird に対して、1835年フォレストは *Metamora* の改訂版を

依頼し、最終的にその採用を拒否しているが、*Nick of the Woods* (1837)の中で家族を先住民に虐殺された平和主義者のクエーカー教徒とインディアン・ヘイターの二重人格者を描いたバードを考えると、恐らくバードが書き換えた *Metamora* はフォレストが考えるメタコム像とは違うものであったのかもしれない。逆に言えば *Metamora* はアメリカの一般大衆にとっては受け入れやすいメタコム像を提供したと言える。ニューヨークから発信されたメタコムの物語はかくしてマサチューセッツの土壌の中で変貌を遂げ、その後半世紀もアメリカの代表的な先住民物語としての地位を獲得し、アメリカ各地で演じられていった。そこにはワシントン・アーヴィングの憐憫の情も、*Yamoyden* の勝者の台本への疑義も、ウィリアム・エイペスの悲痛な叫びもなく、Margaret Fuller がいみじくも言っているように、「他にメリットがないにしても、この地方に属する何かを提供してくれるお気に入りの舞台劇」(6) というアメリカ一般大衆向けの物語に多くの作家の手を経て変容できたのである。

(本論文は2009年10月18日、日本英文学会中部支部第61回大会アメリカ文学シンポジウム「アンテベラムのマイナー文学」(愛知学院大学)において、「1820年代のアメリカ文学と先住民問題 イーストバーンの『ヤモイデン』とチャイルドの『ホボモック』から見たアメリカの変容」という題目で発表したものを加筆訂正したものである。)

注

- 1 *Edinburgh Review*, 33 (Jan. 1820), 79.
- 2 “Hawthorne and His Mosses” 中の “And the day will come, when

you shall say who reads a book by an Englishman that is a modern?” (1161) というメルヴィルの言葉は、明らかにスミスの言葉を念頭に置いて書いた文言である。

- 3 例えば “The Church in the Wilderness”、“Willie Wharton” など、チャイルドの短編小説は数が多いため割愛した。 *Ponteach* は時代も場所もニューイングランドとは全く関係がないが、Philip という非常に狡猾な先住民の設定という点でメタコムを意識した人物描写であることを考慮した。
- 4 アメリカ生まれの劇としての *Metamora* とフォレストに対する当時の評価に関しては、Walter J. Meserve, *Heralds of Promise: The Drama of the American People during the Age of Jackson, 1829-1849* (New York: Greenwood, 1986), 43-69 が詳しい。ミシガン州、ニューハンプシャー州、インディアナ州、イリノイ州などに *Metamora* という町があり、またミシガン州には Oceana County、イリノイ州には Nameoki という町がある。Callary 243; 225 や Vogel 77 を参照。
- 5 “The Ages” はブライアントが 1821 年ハーバード大学学位授与式での Phi Beta Kappa で披露した詩で、ギリシア、ローマ、ヨーロッパにおける愛の失敗、アメリカ先住民の村の愛の欠如故の滅亡に触れた後に、ブライアントはアメリカ大陸における白人文明の支配について次のように続けている。

Look now abroad—another race has filled
These populous borders—wide the wood recedes,
And towns shoot up, and fertile realms are tilled;
.....
Here the free spirit of mankind, at length,

Throws its last fetters off; and who shall place
A limit to the giant's unchained strength,
Or curb his swiftness in the forward race!
(*Poetical Works*, stanzas 32- 33)

- 6 カーチャーはチャイルドとセジウィックの関係について次のように述べている。

It was Sedgwick whom Child most prized. The older writer had thrilled Child by sending her an endorsed copy of *Hope Leslie* (1827)—a gesture that implicitly acknowledged Child's *Hobomok* as an inspiration—and Child had praised it extravagantly without being able to say “*half* of what I felt.” Sedgwick offered Child the role model she had long yearned for. (*Reader* 11-12).

- 7 ブライアントと先住民、ブライアントとジャクソン大統領の関係については Muller 88-90 を参照。
- 8 *Yamoyden* の当時の批評としてはこの他に、“much to [the poet's] credit, the bounds of probability do not appear to have been materially violated by [the imagination of the poet], and the representations of the Indian character and manners, are authenticated by the numerous notes subjoined to every canto” (*Port Folio* 465) や “But we are too much pleased with the poem as a whole—too deeply interested in many of its select and exquisite beauties, to dwell, for a moment, on any thing connected with it, that might be considered as a defect” (*The Investigator* 409) などがある。*Yamoyden* の物語詩と原注については、中村正廣訳『ヤモイデン』も

うひとつのフィリップ王戦争』(中部日本教育文化会、2010年刊行予定、370頁)を参照。

- 9 パン製造業者として成功したチャイルドの父 David Convers Francis は、知的職業への関心など貴族気取りは全くない人物で、大学教育まで受けられたのは五人の子供のうちリディアの兄 Convers Francis だけであった (*Letters* 1)。リディアの読書好きを知った父は、結婚した上娘の住む田舎(メイン州ノリジウォック)へ彼女を送ったと言われる (“Introduction” to *Hobomok* ix-x)。一方セジウィックの父 Theodore Sedgwick は、ブライアントの政治・経済思想に大きな影響を与えた自由貿易、奴隷制廃止論者で、キャサリンもこの政治家、弁護士の父の影響の下、エリート家庭の娘としてニューヨーク、オールバニイ、ボストンの教養学校で教育を受けている。
- 10 Eunice Williams は7歳のとき、フランス軍将官指揮下のカナダ人と先住民の軍勢によるディアフィールド攻撃(1704年)の際に家族とともに誘拐され、彼女はカナダのモホーク族に引き渡された。アブナキ族に引き渡された後に解放された父 John Williams は、娘を連れ戻そうと試みたが、彼が彼女に会えたのは二回だけで、彼女はモホーク族の Arosen と結婚、四人の子供をもうけている。その後も兄弟たちに会いにニューイングランドへやって来たが、白人の世界へ戻るのは最後まで拒否した。Strong 135-45 を参照。

引用文献

“American Literature and Intelligence.” *The Investigator*, vol. 2 (January and April, 1821). London: Thomas and George Underwood,

1821: 405-19.

Apess, William. *A Son of the Forest: The Experience of William Apess, a Native of the Forest. On Our Own Ground: The Complete Writings of William Apess, a Pequot.* Ed. Barry O'Connell. Amherst: U of Massachusetts P, 1992. 1-97.

---. *Eulogy on King Philip, as Pronounced at the Odeon, in Federal Street, Boston. On Our Ground: The Complete Writings of William Apess, a Pequot.* Ed. Barry O'Connell. Amherst: U of Massachusetts P, 1992. 275-310.

Bryant, William Cullen. *The Letters of William Cullen Bryant.* Vol. 1. Ed. Thomas G. Voss. New York: Fordham UP, 1975.

---. *Poetical Works of William Cullen Bryant.* New York: D. Appleton, 1878.

Callary, Edward. *Place Names of Illinois.* Urbana: U of Illinois P, 2008.

Child, Lydia Maria. *Hobomok and Other Writings on Indians.* Ed. Carolyn L. Karcher. New Brunswick: Rutgers UP, 1992.

---. *Lydia Maria Child: Selected Letters, 1817-1880.* Eds. Milton Meltzer and Patricia G. Holland. Amherst: U of Massachusetts P, 1982.

Choate, Rufus. "Lectures and Addresses. The Importance of Illustrating New-England History by a Series of Romances Like the Waverley Novels." *The Works of Rufus Choate, with a Memoir of His Life.* Ed.

- Samuel Gilman Brown. Vol. 1. Boston: Little, Brown and Company, 1862. 319-46.
- Cooper, James Fenimore. *The Wept of Wish-Ton-Wish, A Tale*. 1829; *Works of J. Fenimore Cooper*, vol. 9, rpt.; New York: Greenwood, 1969. 385-557.
- “Critical Remarks on ‘Yamoyden,’ a Poem by Mr. Eastburn of New York, and his Friend.” *Evenings in Autumn; A Series of Essays, Narrative and Miscellaneous*. London: Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, 1822: 237-93.
- Fuller, Margaret. *Papers on Literature and Art*. New York: John Wiley, 1848.
- Karcher, Carolyn L., ed. *A Lydia Maria Child Reader*. Durham: Duke UP, 1997.
- Konkle, Maureen. *Writing Indian Nations: Native Intellectuals and the Politics of Historiography, 1827-1863*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2004.
- Lepore, Jill. *The Name of War: King Philip’s War and the Origins of American Identity*. New York: Vintage, 1999.
- Melville, Herman. “Hawthorne and His Mosses.” *Herman Melville: Pierre, Israel Potter, The Piazza Tales, The Confidence-Man, Uncollected Prose, and Billy Budd, Sailor*. New York: Library of America, 1984. 1154-71.

Muller, Gilbert H. *William Cullen Bryant: Author of America*. Albany: State U of New York P, 2008.

Palfrey, John Gorham. "Yamoyden, a tale of the wars of king Philip, in six cantos. By the late Rev. James Wallis Eastburn, A.M. and his friend." *North American Review*, vol. 12 (April, 1821): 466-88.

Sedgwick, Catharine Maria. *Hope Leslie; Or, Early Times in the Massachusetts*. Ed. Mary Kelley. New Brunswick: Rutgers UP, 1991.

Stone, John Augustus. *Metamora. Metamora and Other Plays*. Ed. Eugene R. Page. Bloomington: Indiana UP, 1965. 1-40; 401-13.

Strong, Pauline Turner. *Captive Selves, Captivating Others: The Politics and Poetics of Colonial American Captivity Narratives*. Boulder: Westview P, 1999.

Vogel, Virgil J. *Indian Names in Michigan*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1986.

Webster, Daniel. *The Great Speeches and Orations of Daniel Webster: With an Essay on Daniel Webster as a Master of English Style*. Ed. Edwin P. Whipple. Boston: Little, Brown, 1879.

"The Writings of Robert C. Sands, in Prose and Verse. With a Memoir of the Author. In Two Volumes." *New-England Magazine*, vol. 6 (April, 1834): 332-35.

“Yamoyden.” *Ladies’ Literary Cabinet*, vol. 3 (New York: December 16, 1820): 44-45.

“Yamoyden—A Tale of the Wars of King Philip.” *The Portfolio*, vol. 10 (1820): 456-65.

中村正廣 「*Yamoyden* から *Hobomok* へ Palfrey の書評と「アメリカ的変容」の関係」 『外国語研究』(愛知教育大学英語研究室) 第 42 号 (2009): 27-57.